

原著

## 漱石前期作品『坊っちゃん』から『吾輩は猫である』へ — 作品の提示する問題 —

戸田 由美

### <要旨>

漱石作品の面白さはその「意外性」にある。この稿では特に、前期作品の共通の問題点である「主人公」不在についての考察を通して「意外性のもつ意味」、「見立てのイメージ」について論じてみようと思う。またそこから進展した「は」と「が」の問題を解明することによって作品世界に横たわるメタ・メッセージを提示したい。

キーワード：主人公不在・意外性・坊っちゃん・吾輩は猫である・見立て・「は」と「が」

はじめに

漱石の作品をかながみるとき、なぜか彼の作品には一本の道、光り輝く様な道筋が見える様な気がする。あざなえる縄のように矛盾に満ちた人間をしばるところに始まった人間漱石の、人間への挑戦としての出発点があった作品『吾輩は猫である』（以下『猫』と記す）から『明暗』に至るまでの作品世界の構築には時代を象徴する深い問いかけと模索がある。その問いかけは、「漱石作品の中に窺われる不思議さの窮極に在るものは何か」という私どものテーマに呼応するものがある。不思議というよりむしろ意外さと表現する方がわかりやすいかも知れない。すなわちそれぞれの作品の意外性を解明することによって、その問いかけは何であるか、今の世に生きる我々の前に明白となるのである。したがって漱石の「今」も我々の「今」も一連の統合されたテーマで貫かれている「永遠の今」としてあることが「象徴する」ことの意味となる。この問題に関しては、別に作品『三四郎』<sup>1)</sup>の面から登場人物広田先生の「君、不二山を翻訳して見た事がありますか」という言葉をもとに 1 「不二山」と「翻訳」という組み合わせの意外さについて 2 翻訳の意義—主観と客観、その同時成立のむずかしさについて 3 象徴 印象 写真主義について という観点をとりあげた。本稿はそのかかわりをも考慮に入れながら意外性の中からどのような表現が可能になってゆくのか論じてみようと思う。

## I 前期作品の共通問題点

拙稿『草枕』論<sup>2)</sup>においても少し触れているが、『猫』の発表が明治39年4月で終わり、『坊っちゃん』の発表が同年4月、『草枕』の発表が同月という事実を前提としてこの三作品を並べてみると、「主人公」不在という共通点が鮮やかに浮かびあがってくる。ただここでいう「主人公」というのは、その人物（或は擬人的存在）の知・情・意の活動が筋（ストーリー）の展開の中心に置かれているような存在を指しているわけである。即ち『猫』の世界は「猫」の口を通して語られ、『坊っちゃん』の世界は「坊っちゃん」の口を通して描かれているし、『草枕』また然り、「余」なる人物の口を借りているのである。しかし彼等は、いずれも上述のような意味では「主人公」の座についてはいない。彼らは「語り手」の役を果していると考えてよいのではないか。

明治39年9月30日の森田草平宛の書簡<sup>3)</sup>は、『草枕』について語る際には逸することはできないのだがその中に奇妙な一節がある。

「従って、草枕の画工の態度と沙翁とは違ふ……」

この文の少し先に「沙翁がハムレットをかく時の了見は分らないが…」とあることからすれば、ここで『草枕』に対比されているのは『ハムレット』であるはずであるから前記引用中の「画工」に対比されるのは登場する「ハムレット」でなければならないし、どうし

ても「沙翁」の態度をとりあげるのであれば、それに対置されるのは「画工」ではなくて「作者」でなければならぬのではないか。「作者」によって「沙翁」と対置せられている「画工」を「主人公」と単純にみなすことが出来ないのである。そしてこのことは『猫』についても『坊っちゃん』についても同様である。「猫」は「墓」をもち、「坊っちゃん」は「松山」の空を仰いだというセミ・ドキュメンタルな面をもった存在である。

以上の様に考察すると、共通の問題として掲げられる「主人公不在」は、作品『猫』『坊っちゃん』における意外性とどのようにかかわってゆくものなのか、またそこから発展する作品世界に内在する真の意義とは何か作品世界と照合し解明したい。このたびは『猫』と『坊っちゃん』に焦点を絞る。

## II 「意外性」のもつ意味

意外さというものは、かたまつた発想ではなくぱつと飛躍すること、思いがけないことが起こってくることを意味する。そのことによってかえって本当のことがわかったり色々な効果がある。当たり前のことをあたりまえに書いていたのでは面白くも可笑しくもない。いわゆる漱石の発想の新機軸といえよう。

### (1) 『坊っちゃん』の場合

坊っちゃんがなぜ四国の学校へ赴任することになったのか、松山という舞台設定に意味があるかどうかという観点から考察してもそれは大変意外な事柄である。また作品末尾、「だから清の墓は小日向の養源寺にある」も短編とはいえ、末句としては唐突である。これらの意表をつく表現はどの様な意味をもつのだろうか。

漱石が松山の中学校に赴任したのは明治29年4月、29歳の折のことで、翌年4月には五高に移っている。僅僅一年の生活であることや、その実態は決して『坊っちゃん』に描かれたようなものではなかったことから、モデル論等も含めて、その実録性には疑問が持たれる。実録性が稀薄になれば反対に虚構性が強まるわけで、当然「何を描こうとしたのか」の問題が生まれる。

「君はいったいどこの産だ」／「おれは江戸っ子だ」  
「うん江戸っ子か 道理で負け惜しみが強いと思った」  
「君はどこだ」／「僕は会津だ」(1章)

山嵐と肝胆相照らすきっかけになる会話がこうした形で始められている。「真すぐでよいご気性」というのは清の「坊っちゃん」評であるが、これは同時に彼の自

負でもあるようである。

「そんならどっちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と言うと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。(1章)

箱根のさきには鬼が棲むと信じて疑わなかった「江戸っ子」の気風が如実に捉えられている。これ以外にも「江戸っ子」という言葉は頻繁に現われる。そしてこの「江戸っ子」と対照的なのが「田舎者」である。「…小僧はぼんやりして 知らんがのと言った」「気のきかぬ田舎者だこれが最初で、「田舎者のくせに人をみくびった」／「田舎者はしみつたれだから」／「田舎者はこの呼吸がわからないから……」等が印象の目新しい一二三章に散見する。ここにあげられた「気のきかぬ」「しみつたれ」「呼吸がわからない」の反対が、実は「江戸っ子」の「気っ風」になるわけであるが果してこの「地域性」に根ざした描写はどの様な意味をもつものなのか。

「江戸っ子」が会話・対話の中で啖呵っぼく切られるのに対して「田舎者」は「地」の文にしか現われえない。単純なユーモアとしては見過せないものがあるのを感じるのである。たしかに「江戸っ子」の目には、気のきかない、野暮ったいのだが、

(略)六人は悠々と引き揚げた。うわべだけは教師のおれよりよっぽどえらく見える。実は落ちついているだけでなおおるい。おれにはとうていこれほどの度胸はない

イナゴ事件の描写であるが、まさにこれは「江戸っ子」の敗北ではないのか。私はここに作者のアイロニーを読む。現実の松山生活はむしろ恵まれていたのではないかといわれるだけに、彼が当時松山で得たものをなぜ戯画化したのか。明治39年4月、漱石39歳にしてホトトギスに発表されるまでの十年の歳月の経過があるとはいえ、「江戸っ子」の敗北感を告白するにはこうした形をとらざるを得なかったのではないかと思うのである。作品『坊っちゃん』は「笑い」に満ちているが、「作者」は決して笑ってはいない。所謂「日清」から「日露」へこの十年の経過は彼の人生観をより深めるところがあったに相違いないのである。なお、これに関してやや付会の解釈を申し添えるなら「坊っちゃん」退場の連れが「会津」(山嵐)であることも決して偶然ではなく、作者の計算によるものと考えられる。しきりに同伴を望んだ「清」を東京に残したのも「坊っちゃん」の悲鳴の受け手としての役割を果す為にはどうしても東京を離れることはできなかったのである。ただ謂わばペースにあふれるはずの作品が何故あのように明るいのか。私はそこに後半の「則天去私」への胚

胎を見る。

明治39年3月23日虚子宛の書簡<sup>4)</sup>で彼は、

新作小説存外長いものになり、事件が段々に発展只今109段の所です。もう山を2つ3つかけば千枚楽になります。趣味の遣伝で時間がなくて急ぎすぎたから今度はゆるゆるやる積です。もしうまく自然に大尾に至れば名作然らずんば失敗ここが肝心の急所ですからしばらく待って頂戴 出来次第電話をかけます。松山だか何だか分からない言葉が多いので閉口……

ここでいう新作小説が『坊っちゃん』であることは松山の名が見えることから明らかであるが、これは次のことを示唆している。

1. 執筆状況が順調であること
2. 執筆を急いでいないこと
3. 名作か失敗作かに賭けていること

特に第3点は何を意味しているのか。こうした場合、まず考えられることは、何か新しいものをはらんでいるという推察である。しかもそれは、誰の目にも一見明らかに映るものではなく、作者の胸中に秘められていることが想像される。こう推量すると、この「名作か、失敗作か」は単純な「不安」の表現ではなく、「抱負」の表現ではないかと思われるのである。殊に書簡の宛先が虚子であることが一層その思いを強くさせる。それでは「抱負」は何であったのか。まず考えられることは、既に前に触れたようにあの過剰なまでの「笑い」である。さながら「道化」の観さえある「面」の陰にむしろ苦渋に満ちた一つの顔が見えるのである。十年の歳月は松山での生活を表面戯画化することを松山の人たちは許すであろうという計算もあったのではないか。そしてその期待する松山の人たちの「寛容」に対して応えることのできるものは何かといえば、作者の「誠実」しかなかったと思う。そして彼が賭けたのも実はそれではなかったのか。具体的に彼はそれをどう表現しようとしたのか。

挨拶したうちに教頭のなにかしというのがいた。これは文学士だそうだ。文学士といえば大学の卒業生だからえらい人なんでしょう……もっとも驚いたのはこの暑いのにフランネルのシャツを着ている。いくら薄い地には相違なくとも暑いにはきまっている。文学士だけにご苦労千万なりをしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人をばかにしている。

赤シャツの登場であるが、「文学士」が再度繰り返されている。「学士様なら…」の語が宣伝された当時の風潮を実感するすべはないが、このやゆの表現は相当なものである。「男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じゃないか…文学士がこれじゃみつともない」／

「文学士なんてみんなあんな連中ならつまらんものだ」いずれも赤シャツにまつわる描写であるが、自身、文学士でなければ発想できない感覚が潜在するのである。すなわち、その資格をもたないものが使えば文字通りの罵言になるところであるが、有資格のものから出れば、あるいはウィットになり自遜になり卑下になる。そうした用語になるのではなからうか。そういう意味では語るに落つとは言わないまでも、ここにも作者の計算が覗いている感じがする。しかしこうして作中人物と作者との距離が定められると、物いい・持物等すべて読者の笑いを呼ぶ種にすることが出来るのである。しかしただそれだけの狙いで彼は赤シャツを想定したのであろうか。岩波文庫の解説で岡崎義恵氏は、

しかし最も重要なことはこの作で彼は自身の内生活の解剖と反省とを試みていることである

と言っているように、笑いの対象として描き出したものではない。「そうしてみると、この作では彼は自身の中の赤シャツ的要素はこれを悪い方へ極度に誇張し、坊っちゃん的要素は同情的に取扱っているということが出来る」とも指摘している。おおよそ私どもは、自身について語る場合、長所よりも短所の方が挙げやすいのであるが、殊に自己に厳しかった彼にあつては、結果的にも容赦しないところがあつたものと思われるのである。上述の「文学士」の呼称に対するこだわりも、呼称が十二分に物を言ったと想像される現実の松山生活を想起するとき、それに甘えるところがありはしなかったかという思いから逃れることが出来なかったのではないか。繰り返されるコハクのパイプに対する執念も、その頃のステータスシンボルであつたことを考えると、作者自身の嫌悪と執心のコンプレックスさえ感じられるのである。岡崎氏は『草枕』を「耽美派」『坊っちゃん』を「人生派」と位置づけている。愛憎は表裏をなすといわれるが明治39年4月4日付けの大前繞石宛の書簡<sup>5)</sup>に

山嵐の如きは中学のみならず高等学校にも大学にも居らぬ事と存し候。然しノダの如きは累々然としてコロガリ居り候…僕は教育者として適任とみなさるる狸や赤シャツよりも不適なる山嵐や坊っちゃんを愛し候

とあるのを見ても唾棄すべき存在にはなりきってはいなかったのではないか。自己の分身の意識が潜在したからであると考えるのである。岡崎氏の言う「内生活の解剖」をこう考えると、このことは虚子への書簡にも述べられている様に、その成否は彼にとって正しく

賭けるに値するものであったわけである。

「江戸」は「松山」に敗れ、捨てるべくして捨て得なかった赤シャツを抱いて松山を去る坊っちゃんの帰るところは「清」以外にあるはずはない。

だから清の墓は小日向の養源寺にある

の匂が千鈞の重みをもってくる。この「だから」は「清」の遺言をのみ指すものではない。「坊っちゃん」のすべてがそこにあると言ってよいのである。母なる存在というよりむしろそれをつきぬけた魂のかえるところ、ハイマートなふるさとの役割、客観的存在として清があったのである。篇中では「おれ」を称しているものの、清にとっては最後まで「坊っちゃん」であったことを改めて確認させる役割を果しているのであって、青年教師の所謂「坊っちゃん」ぶりを描いたのではないのである。こうして清と坊っちゃんの関係は小日向の養源寺でつながるのである。

ちなみに夏目家の菩提寺は本法寺<sup>6)</sup>とあって、小石川の小日向の高台の南はずれに位置し、この寺に眠る夏目家の人びとの中に漱石が心を寄せていた嫂登世もいる。惜しいことに養源寺は小日向一帯には見当たらない。が、小日向という地名でつながっているのである。清の運命あるいは性格が坊っちゃんの精神を支えているのである。この頃漱石はまだ死してはいないにしても、漱石自身の最後の終焉、精神の終末を感ずる。「だから」ということばの重みは、作品に安らぎのつながりを加味するのである。

## (2) 『猫』の場合

明治38年10月6日、漱石は『吾輩は猫である』自序<sup>7)</sup>において次の様に述べている。

「吾輩は猫である」は雑誌ホトトギスに連載した続き物である。もとより纏った話の筋を讀ませる普通の小説ではないから、どこで切って一冊としても興味の上においてさしたる影響のあろうはずがない。(略)この書は趣向もなく、構造もなく、尾頭の心もとなき海風のような文章であるから、たといこの一巻で消えてなくなったところで、いっこうさしつかえはない。(傍点筆者)

語り手が猫であるという珍しさはたしかに「普通の小説ではない」。古い評論家長谷川如是閑も

興味を中心は性格の発展になくして、性格や事件のユーモラスな観察と記述とにあるのだから、読者は連続漫画を見る場合のようにその場面に吸引されるのである。作者も亦始めも終わりもなくいろいろな興味の場面を連続せしめることができるので「猫」も何度か完了のところをさらに継続することを得たのである(傍点筆者)

と言っているが、現代流行の漫画を支えているものが性格の発展ではなく事件の意外性であるとは衆知の通りである。

「吾輩は猫である。名前はまだない。」という有名な冒頭から始まるこの作品は結局、猫の視点でもって描かれているのである。思いあがった人間中心の視点を放棄した、あくまでも猫の目で描かれたということの新しさには一種の意外性がある。西欧絵画の視点が人間の目であるならば、日本の浮世絵は鳥の目、虫の目をもって描かれているらしい。画家ヴァン・ゴッホは「日本の浮世絵研究」において、この視点を独特なものとして捉えている。猫の視点もそれに類似した独特な遠近法を持ち合わせていると解釈できよう。猫の視点で描かれた作品『猫』も一種の浮世絵と解することも可能なのではあるまいか。独特な遠近法といえ、例えば猫の世界を真中にとらえる世界をもつパースペクティブな見方と言ってもよい。人間というものは上から見下ろしているが、猫の視点で世界を見上げると人間が手を抜いた部分がよく見えてくる。下からの視点は全く考えていなかったということに気づく。我々人間も視点をずらして工夫すれば別の世界が生まれるのかも知れない。彼らはむしろその中でゆったりと暮らしているのだ。平たく言うならば我々人間の生活のあり方としての現在、また生活の中で生まれるものの考え方を排除することが猫の視点をもつということでもある。作品『猫』の〈吾輩である〉この無名の猫は、縁あってたどり着いた珍野苦沙弥という中学校の英語教師宅で起こる全ての事柄、事件、人間模様等々をひとつひとつつぶさに観察し、具体的に辛らつに批判するのである。苦沙弥先生を囲む美学者の迷亭、理学者の寒月、哲学者独仙、詩人の東風の話、会話をかたわらでじっくりと聞き、ユーモラスにあるいは厳しくその様子を語る。人間ほど我がままで愚かで身勝手な生き者はないと酷評を加えながら「なまこの様に」文章は続いてゆく。語り手としての吾輩、聞き手としての吾輩がここにいるのである。

以下、猫の目をもって書かれた人間がどの様に表現されているのか掲げてみる。但しその際、その猫の目が、「人間的な判断でものを見る」場合と「人間的な考えを入れなくて見る」場合とに大別されるのである。タイプ別に対比してみよう<sup>8)</sup>。

## 人間的な考えを入れないで見ると

- ・教師というものは実に楽なものだ。
- ・書生の顔を見たのがいわゆる人間というものを見始であろう。第一毛を以て裝飾されべきは顔がつるつるしてまるで菓匠だ。
- ・顔の真中が余りに突起している。
- ・吾輩は人間と同居して彼らを観察すればするほど彼らはわがままなものと断言せざるを得ないようになった。
- ・何となく人間臭い所へ出た。
- ・人間ほど不人情なものはない。
- ・隣の三毛君などは人間が所有権という事を解していないといって大に憤慨している。
- ・いくら人間だってそういつまでも栄えることはあるまい。
- ・元来人間というものは自己の力量に慢じて増長している。
- ・いくらかせいで鼠をとったって一いつてえ人間ほどあてえやつは世の中にいねえぜ。
- ・元来人間がなんぞという猫々ともなげに軽侮の口調をもって吾輩を評価する癖があるのははなはだよくない。
- ・人間の目はただ向上とかなんとかいつて空ばかり見ているものだから
- ・彼は性の悪い牡蠣のごとく書斎に吸い付けて、かつて外界に向かって口を開いたことがない。
- ・人間は利己主義から割り出した公平という念は猫よりまさっているかもしれぬが、知恵はかえて猫より劣っているようだ。
- ・人間の心理ほど解しがたいものはない。この主人の今の心はおこっているのだから浮かれているのだから…ちっともわからない。
- ・餅は魔物だと疳づいた時は既に遅かった。
- ・辛抱が肝心だと思って左右かわるがわるに動かしたがやはり依然として齒は餅の中にぶらさがっている。ええめんどろだと両足を一度に使う。
- ・すると不思議なことにこの時だけはあと足2本で立つことができた。なんだか猫でないような感じがする。
- ・我ながらよくこんなに器用に立っていられたと思う。
- ・猫だって笑わないとは限らない。人間は自分よりほかに笑える者がないように思っているのは間違いである。吾輩が笑うのは鼻のあなを三角にして咽喉仏を震動させて笑うのだから人間にはわからぬはずである。

## 人間的な判断でものを見る場合

- ・ただその日その日がどうかこうにか送られればよい。
- ・しかし人間というものはどうてい吾輩猫属の言語を解しうるくらいに天の恵みに浴しておらん動物であるから残念ながらそのままにしておいた。
- ・同類相求むとは昔からある言葉だそうだがそのとおり餅屋は餅屋、猫は猫で猫のことならやはり猫でなくてはわからぬ。
- ・なにも顔のまずい例に吾輩を出さなくともよさそうなものだ。
- ・何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。
- ・猫などはそこへゆくと単純なものだ。食いたければ食い、寝たければ寝る、おこる時は一生懸命におこり、泣くときは絶体絶命に泣く。
- ・主人のように裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に発揮する必要があるかもしれないが…。
- ・この餅も主人と同じようにどうしても割り切れない。
- ・餅がくっついているので毫も愉快を感じない。
- ・歯答えはあるが、歯答えがあるだけでどうしても始末をつける事が出来ない。
- ・大空は万物をおおうため大地は万物を載せるためにできている。
- ・人間もかようにうじゃうじゃいるが同じ顔をしている者は世界じゅうに一人もいない。
- ・およそ人間において何が見苦しいといつて口をあけて寝るほどの不体裁はあるまいと思う。
- ・世の中には悪い事をしておりながら、自分はどこまでも善人だと考えているものがある。
- ・人間から見たら猫などは年が年じゅう同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至つて単純な銭のかからぬ生涯を送っているように思われるかもしれないが…。
- ・猫のように一年じゅう同じ物を着通せというのは、不完全に生まれついた彼らにとって、ちと無理かもしれないが…。
- ・第一頭の毛などというものは自然にはえるのだからほうっておくほうが最も簡便で当人のためになるだろう。

## 人間的な考えを入れないで見える場合

- ・猫などは生涯こんな恥をかいたことがない。
- ・人間というものは時間をつぶすために口を運動させておかしくもないことを笑ったりおもしろくもないことをうれしがったりするほかに能もない者だと思った。
- ・二匹と言う代わりにふたりと言った。下女の考えでは猫と人間とは同種族ものと思っっているらしい。
- ・しかし俗人の考うる全知全能は時によると無知無能とも解釈ができる。こういうのは明らかにパラドックスである。しかるにこのパラドックスを道破した者は天地開闢以来吾輩のみであろうと考えると自分ながらまんざらな猫でもないという虚栄心も出るから(略)猫もばかにできないということを高慢なる人間諸君の脳裏にたたきこみたいと考える。
- ・よくまああれだけの簡単な材料でかくまで異様な顔を見つけたものだと思うと、製造家の伎倆に感服せざるをえない。
- ・猫の立場からいうと同一の事実がかえって神の無能力を証明しているとも解釈出来る。
- ・彼ら人間の眼は平面の上に2つ並んでいるので左右を一時に見る事が出来んから事物の半面だけしか視線内に這入らんのは気の毒な次第である。
- ・人を見たら猫食いと思え
- ・おりおりは団扇でも使ってみようという気も起こらねどはないが、とにかく握ることができないのだからしかたがない。
- ・櫛とか称する無意味な鋸のよう道具を用いて頭の毛を左右に等分して嬉しがってるものもある。中にはこの仕切りがつむじを通り過ぎて後ろまで食み出しているのがある。まるで贗造の芭蕉葉のようだ。
- ・足が四本あるのに二本しか使わないというから贅沢だ。いつでも二本で済して、残る二本は到来のぼうだらのように手持無沙汰にぶらさげているのは馬鹿々々しい。
- ・これで見ると人間はよほど猫より閑なもので退屈のあまりかようないたずらを考察して楽しんでいるものと察せられる。
- ・座布団から腐れかかった尻を離さざるをもって旦那の名誉とやに下がって暮らしたのは覚えているはずだ。
- ・人間は昔から野呂間である。
- ・波の上に今呼吸を引き取った一呼吸ではいかん、魚の事だから潮を引き取ったといわなければならん。
- ・人間にも油野郎、みんな野郎、おいしいつくつく野郎があるごとく、蟬にも油蟬、みんなおいしいつくつくがある。

## 人間的な判断でものを見る場合

- ・猫の一年は人間の十年にかけ合うとってよろしい。
- ・人間の年月と猫の星霜を同じ割合に打算するのははなはだしき誤謬である。
- ・吾輩は四本の足を有しているから大地を行く事においては敢て他の動物には劣るとは思わない。
- ・天下に何がおもしろいといつて、いまだ食わざるものを食いいまだ見ざるものを見るほどの愉快はない。
- ・猫の事だから西洋婦人の礼服を拝見した事はない。
- ・裸体は希臘<sup>ギリシヤ</sup>羅馬<sup>ローマ</sup>の遺風が文芸復興時代の淫靡の風に誘われてから流行りだしたもので、ギリシヤ人やローマ人は平常から裸体を見做れていたのだから、これを以て風教上の利害の關係があるなどとは豪も思い及ばなかったのだろうが北歐は寒い所だ。
- ・衣服はかくのごとく人間にもだいなものである。
- ・その昔自然は人間を平等なるものに製造して世の中にほり出した。だからどんな人間でも生まれるときは必ず赤裸である(略)しかるにどうかしておれはおれだだけが見てもおれだといふところが目につくようにしたい。それについては何か人がみてあつとたまげる物をからだにつけてみたい。
- ・もつともただ濁っているのではない。あぶらぎって重たげに濁っている(略)一週間に一度しか水をかえないのだそうだ。(洗湯)
- ・熱い熱いという声が吾輩の耳を貫ぬいて左右へ抜けるように頭の中で乱れ合う。
- ・世の中に退屈ほど我慢できにくいものはない。何か活気を刺激する事件がないと生きているのがつらいものだ。
- ・昔からからかうという娯楽にふける者は人の気を知らなればか大名のような退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は考るに暇なきほど頭の発達が幼稚で、しかも活気の使い道に窮する少年かに限っている。
- ・だから一方には自分の勢力が示したくって、しかもそんなに人に害を与えたくないという場合には、からかうのがいちばんお恰好である。多少人を傷つけなければ自己のえらいことは事実の上に証拠だてられない。事実になって出てこない、頭のうちで安心していても存外快樂のうすいものである。人間は自己をたのむものである。

## 人間的な考えを入れないで見の場合

- ・もし吾輩のごとく風呂というものを見たことがないなら、早く見るがいい。
- ・まねをする点においては蟬は人間に劣らぬくらいばかりである。
- ・人間は愚なものであるから猫まで声で一猫まで声は人間の吾輩に対して出す声だ。吾輩を目安にして考えれば猫まで声ではない、なでられ声である。
- ・人間世界を通じて行なわれる愛の法則の第一条にはこうあるそうだ。  
—自己の利益になるあいだは、すべからく人を愛すべし。
- ・人間のひま潰しに案出した洗湯なるものさうだ。人間の作ったものだから穢なものでないには極っているが…
- ・人間が自己のために設備した浴場へ異類の猫を入れるだけの分量があるだろうか。
- ・人間として着物をつけないのは象の鼻なきのごとく学校の生徒なきのごとく兵隊の勇気なきのごとく全くその本体を失っている。
- ・近ごろは裸体画裸体画といってしきりに裸体を主張する先生もあるが(略)生まれてから今日に至るまで一日も裸体になったことがない吾輩から見ると、どうしても間違っている。
- ・これで考えても彼らの礼服なるものは一種の<sup>とんちんかた</sup>頓珍漢的作用によって、ばかどばかの相談から成立したものだといふことがわかる。
- ・化け物(人間)のやることには規律がないから秩序立った証明をするのに骨が折れる。
- ・その声には黄なもの、青いもの、赤いもの黒いものもあるが互いにかさなりかかって一種名状すべからざる音響を浴場内にみなぎらす。
- ・猫をばかにしている。(略)つまり知恵の足りないところからわいた仔(ぼうふら)のようなものと思惟する。ぶてば必ず鳴かなければならんとなると吾輩は迷惑である。
- ・吾輩の考えでは奥山の猿と、学校の教師がからかうにはいちばん手ごろである。
- ・奥歯でかみつぶしたかんしゃく玉が炎となって鼻の穴から抜けるので、小鼻がいちぢるしく怒って見える。
- ・越後獅子の鼻は人間がおこった時の恰好をかたどって(略)
- ・このあばたはけっして輕蔑の意をもって見るべきものではない。滔々たる流俗に抵する不吉不磨の穴の集合体であって、大いに吾人の尊敬に値するでこぼこといってもよろしい。  
ただきたならしいものが欠点である。
- ・鏡というものは気味の悪いものである。

## 人間的な判断でものを見る場合

- ・吾輩は主人の顔を見るたびに考える。まあなんの因果でこんな妙な顔をして臆面なく20世紀の空気を呼吸しているのだろう。
  - ・すべて人間の研究というものは自己を研究するのである。しかも自己の研究は自己以外にだれもしてくれる者はない。
  - ・しかし自分に愛想の尽きかけた時、自我の萎縮したおりは鏡を見るほど薬になることはない。
- こんな顔でよくまあ人で候とそりかえって今日まで暮らされたものだど気がつくにきまっている。そこへ気がついた時が人間の生涯中最もありがたい期節である。
- ・自分で自分のばかを承知しているほど尊く見えることはない。
  - ・人間も返事がうるさくなるくらい無精になると、どことなく趣があるが、こんな人に限って女に好かれたためしがない。
  - ・自分の子ながらも少し持て余しているところである。  
持て余すくらいなら製造しなければいいのだが、そこが人間である。
  - ・世の中を見渡すと無能無才の小人ほど、いやにのさばり出て柄にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全くこの坊は時代から萌芽しているのである。
  - ・ここの細君の掃除法のごときに至ってはすこぶる無意義のものと言わざるをえない。
  - ・今の世の働きのあるという人を拝見すると、うそをついて人を釣ること、先へ回って馬の目玉を抜くこと、虚勢を張って人をおどかすこと、鎌をかけて人を陥れることよりほかに何も知らないようだ。  
中学などの少年輩までが見よう見まねに、こうしなくては幅がきかないと心得ちがいをして本来なら赤面してしめるべきのを得々と履行して未来の紳士だと思っている。
  - ・平生は大方の人が大方の人であるから、見ても聞いても張り合いのないくらい平凡である。
  - ・碁を發明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらわれるものとすれば窮屈なる碁石の運命はせせこましい人間の性質を代表しているといっても差支ない。

### 人間的な考えを入れないで見える場合

- ・もっとも河豚のふくれるのはまんべんなくまん丸にふくれるのだがおさんとくると、元来の骨格が多角性であって、その骨格どおりにふくれあがるのだからまるで水気になやんでいる六角時計のようなものだ。
- ・猫のくせにどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが（略）吾輩はこれで読心術を心得ている。
- ・吾輩は吾輩の柔かな毛衣をそっと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電気が起って彼の腹の中のいきさつが手にとるように吾輩の心眼に映ずる。
- ・先達てなどは主人がやさしく吾輩の頭を撫で廻しながら突然この猫の皮を剥いでちゃんちゃんにしたらさぞあたたかだよかろうと飛んでもない了見をむらむらと起したのを即座に気取って覚えずひやとした事さえある。
- ・吾輩も日本の猫だから多少の愛国心はある。
- ・日本の人間は猫ほどの気概もないとみえる。
- ・突然妙な人が御客に来た。17、8の女学生である。踵のまがった靴を履いて、紫色の袴を引きずって、髪を算盤珠のようにふくらまして勝手口から案内も乞わずに上って来た。
- ・人間は生意気なようでもやはり、どこか抜けている。
- ・人間がそんなに情深い、思いやりのある動物であるとは甚だ受け取りにくい。
- ・吾輩は世間が狭いから基盤というものは近来になって始めて拝見したのだが考えれば考えるほど妙に出来ている。
- ・人間とはしいて苦痛を求めるものであると一言に評してもよかろう。
- ・巻煙草の死骸が算を乱す火鉢の中を見れば火はとくの昔に消えている。
- ・猫の悲しさは力づくでは到底人間には叶わない。
- ・人間はなんの酔興でこんな腐ったものを飲むのかわからないが、猫にはとても飲み切れない。どうしても猫とビールは性が合わない。
- ・休養は猫といえども必要である。
- ・鼻は猫にとっても急所である。
- ・現今地球上にあばたっ面を有して生息している人間は何人位あるか知らんが、吾輩が交際の区域内に於て打算してみると、猫には一匹もない。人間にはたった一人ある。

### 人間的な判断でものを見る場合

- ・猫だって飲めば陽気にならんこともあるまい。
- ・どうせいつ死ぬか知れぬ命だ。なんでも命のあるうちにしておくことだ。
- ・のんきと見える人々も心の底をたたいてみるとどこか悲しい音がする。
- ・一度遣った事は二度遣りたいもので二度試みた事は三度試みたいのは人間にのみ限らるる好奇心ではない、猫といえどもこの心理的特権を有してこの世界に生れ出でたものと認定して頂かねばならぬ。
- ・人を人と思わない位なら猫を猫とも思うまい。



以上が猫の人間評である。この他にも「吾輩は」を主語とする文例は113例にも及ぶ。そもそも猫の視点とは人間の視点を入れられないでみるということであった。拙稿『三四郎』論<sup>1)</sup>の「手法」について論じた中でも触れたが、人間の目で見ると擬人化するところを猫の視点を置くことによって猫と吾輩とを同格とし、人間の狭い量見を捨て自身の視点を捨てようとした。猫の視点は自分のせまい視野からの解放である。江戸趣味的な擬人化する卑俗さをどこかで超越させようとしたのである。だからこそ「吾輩は猫である」という表現になった。そしてこの「○は○である」というスタイルこそを「見立て」というが、猫と吾輩とを同格とするなら何故、先に述べた様な「人間的な考えを入れられないで見る場合」と「人間的な判断でものを見る場合」という見方に大別されたのだろうか。これでは吾輩が猫になったり自分になったり交錯していることを意味するのではなからうか。こうした違いはどのように出来たものなのだろうか。おそらくそれは、「猫を人間に見立てる」という「見立て」の原理に大にかかわるものであると思われる。そのかわりを考察しながらその真意を究めてみたいと思う。

### Ⅲ 見立て

「見立て」というのは、ある対象の中に最も自分と合うものを発見することである。人が見落としている様なことを見つけるといふことがあるわけで、例えば「呉服屋で着物を見立てる」といえば、自分に合いそうなものを見つけるといふことである。その対象の中に自分の姿が入っているということになる。また慶長年間の日葡辞書に「城の見立て」<sup>9)</sup>というのがあるが、お城を建てるのに一番ふさわしい場所を見つける、つまりある対象の中に自分の希望や思いがピタリと一緒になった状態をいうのである。「医者の見立て」もそうである。単なる外側からの観察ではなく、あるものによってその本質を外から判断することである。だから対象と自分との関係が気分的にひとつになるのではなく、何かの意味づけがされている場合、「見立て」となるのである。すなわち対象の中に入りこんで中にあるものと自分との視点の一致をみるということである。何かを見て定める。そのものずばりを対象の中に発見する。したがって漱石はひとつのものを見たときその奥に本質的に何を見ているか、である。

また何かに自分の精神を入れこんでしまい、気分的な関係で一体になる場合は、「象徴的」となってゆく。

この点が「見立て」と「象徴」とのきわだつ相違である。

さらにつけ加えるならば、「比喩」と「見立て」も混同しやすい。比喩はものともとのを比較して形式的に外側のものを見て、似ているけれどもちがうことを言う。「あの人は病人のようだ」(○は○のようだ)という場合、病人の様に見えるけれども病人ではないとなる。「見立て」「象徴」「比喩」の相違は以上の通りである。したがって対象が自分から離れて自由に活躍できる猫もそうであるが、自分勝手であるのが「見立て」なのである。

この様に考察すると「見立て」は決して対象と自分が気分的にひとつになる「象徴」とはいえず、またそのものを正確に客観的に捉えていく写実主義でも決してない。象徴主義は写実とは相反するもので心の内なるものを記す。しかし猫の視点はみたままをあるがまま、ものが見える様に描くということである。見えるとおりに描いていくものの中にそのものらしさが出て写実に近ければ写実になる。又、筆者の精神から象徴が出た場合は、象徴になるというわけである。したがって猫の視点は、本質を捉えようとする象徴主義と真実をうつつ写実主義との中間に属す印象主義的なものである。だから、あのときはこう思った、このたびはこうである、と立体的なものを時間的に還元してゆくものである。こういった事は俳諧も同じである。芭蕉一座の連句の中に次の様な句がある。

あかつき替る宵の分別 荊口

これに関して、赤羽学氏が『芭蕉俳句鑑賞』<sup>10)</sup>において卓越なる解釈をほどこしているが

宵の分別が朝には替る。今日の分別が明日はがらりと替る。こうした現象に芭蕉は人間の心の不定を見ているであろう。人間の心が不定であるばかりではない。自然も世の中もすべてが不定である。

猫の視点が芭蕉のように本当に猫の目になってこの世界を見ている全くの象徴の世界ではないにしても、まさに俳諧も猫の視点も印象主義的であり、客観的なものを定着させないで変わってゆくことを示唆している。その時間の空間化が「○は○である」となる。

そうすると「吾輩」としての「猫」の目はあくまでも空間を追いつづけるが「吾輩」は飽くことなく時間の流れに身を任せる存在となる。これは文字どおり俳句的な単純な「見立て」といえよう。これが前章で述べた「人間的な考えを入れられないで見る場合」で「吾輩は猫である」(吾輩は誰か一猫です)となる。

しかし、その目が「猫」の目ではなく「自分」の目になる場合は「人間的な判断でものを見る場合」となり、「吾輩が猫である」（猫は誰か—吾輩です）となってしまうのではなからうか。これは作家漱石が我々に暗に、日本語の避けて通ることの出来ない「真実と表現」「中味と形式」の問題を「は」と「が」を通してメタメッセージとして表明している様に思えてならない。

#### IV 「は」と「が」

作品『猫』の世界に決して写実主義がないということとは必然的に「は」と「が」の問題にかかわってくるのだが、「吾輩は猫である」の「は」は、「○は○である」という文章におけるものとの関係を示すのではなく、吾輩というつくべつの存在を呈示して取り立てて表わしているのである。あるものの中から特定にもものを取り出すときに「は」を使うのである。時枝氏の文法論によると他の例として

山が高い……事実を表す  
 山は高い……作者の主観や見方が入っている  
 呈示している→それを特に取り出して、特に主題化する

となるがそういう意味で「見立て」は成立する。「吾輩は猫である」も「吾輩が猫である」という表現も事実の上では言葉としてはどちらとも言える。しかし表現の内容としては異なるものである。「事実の表現」という観点から眺めるならば森本哲郎氏<sup>11)</sup>が2000年解けなかった「嘘つきのパラドックス」という命題について説明される中で例えば「私は嘘つきだ」という陳述の真か偽かはあくまでその命題だけのこととして文章だけのレベルで表現だけの範囲で判定しなければいけないことを指摘される。したがってそれを「吾輩は猫である」になぞらえるならば、まず題目として吾輩というものを取り上げてわかっているものとしてじぶんをそこへ提示して「吾輩は」とした。それは何かという問いがそこに設定されその答えとして「猫である」と言っただけのことであるから、それ以上の見方もない。本当に猫かどうか、猫は人間ではないのになどと事実と結びつけて考えるということは表現の問題としての「は」と「が」の問題を逸脱するという意味になる。日本語は事実から離れた立場にすることが出来るのである。

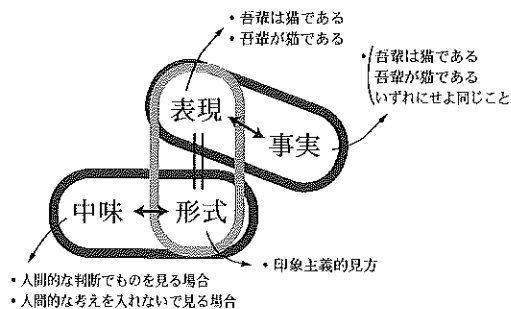
さらに「中味と形式」という観点から考察すると猫の視点（中味）は人間的な判断でものを見る場合と人間的な考えを入れないで見る場合というやや複雑化する

ところを形式で説明するなら印象主義的視点と一言であっさり片付けられるということである。

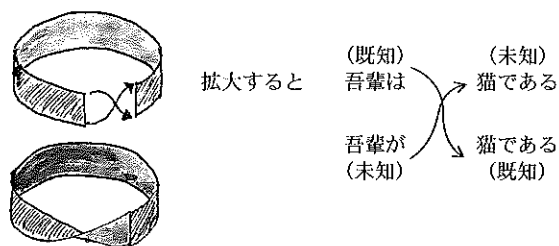
漱石は明治44年八月堺に於て講演で「中味と形式」<sup>12)</sup>と題して次の様に述べている。

要するに複雑な内容を纏め得る程度以上に纏めた簡略な形式にして見せると通られるのだから困ります（中略）して見ると要するに形式は内容の為の形式であって形式の為に内容が出来るのではないと云ふ譯になる

しかも人間は事実と表現、中味と形式をいっしょに考えてしまうので「見立て」にかかわる問題の解明がより一層むずかしくなるのではなからうか。言語を覚えることは単語を覚えることではなく、認識と表現の形式を覚えることだからである。以上の考察を図式化するならば下図のようになるのではなからうか。



「中味と形式」「表現と形式」「表現と事実」という三層の重なり合いの中で「は」と「が」の使い分けがなされ、「表現と中味」「形式と事実」の一致をもって時間は空間化され立体的なものを時間的に還元してゆくのではなからうか。それはおそらく「相対する辺をはり合わせてできる曲面」であり「境界はあるが表裏のない位相幾何学の空間図形」であるメービウスの帯となるのではないかと考える。これがいわゆる日本人の言語の判断形式であり日本語のもつ特長ではないかと考える。漱石は『猫』をとおして「は」と「が」の問題と日本語の特質を語りたかったのではないかと思う。



おわりに

坊ちゃんと清、吾輩と猫という結びつきから意外性の問題に端を発した漱石初期作品の提示する問題は「見立て」「は」と「が」にまで及んだ。英文学者であった漱石が自身の小説を実験小説として、これから日本語を学ぶ人たちによりわかりやすく日本語を修得するために言語のポイントエッセンスを呈示している様にさえ思われる。作品そのものこそ、「日本語のあり方」であり、漱石版「文法白書」のようにさえ思われる。我々は彼のメッセージに覚醒しなければいけないのではなからうか。

参考文献

- 1) 戸田由美「君、不二山を翻訳して見た事がありますかー 漱石『三四郎』小論一『研究紀要』(西南女学院短期大学) 38、1991
- 2) 戸田由美「漱石 草枕の世界ーその手法をめぐってー 日本文藝学 第24号 1987
- 3) 4) 5) 7) 12) は岩波書店刊 漱石全集による
- 6) 日本のこころ 夏目漱石 別冊太陽 生涯と作品の舞台をたずねて 中島国彦 186頁 1980
- 8) 角川文庫版『吾輩は猫である』を使用
- 9) 慶長年間 日葡辞書
- 10) 赤羽学『芭蕉俳句鑑賞』清水弘文堂 103頁 1987
- 11) 現代のエスプリNo.237 日本語の本性

On Early Works of Natsume-Soseki  
… A Preliminary Essay on the Themes of *Bochan* and *Cat* …

Yumi Toda

< Abstract >

The early works of Natsume-Soseki continue to surprise readers with unexpected developments of stories. In this essay the common issues in *Bochan* and *Cat*, “meaning of the unexpectedness” and “image of comparison”, are examined. The usage of “助詞” (postpositional words), “は” and “が”, is also analyzed; thus helping to elucidate hidden messages from these works.

Keywords: absence of hero; unexpectedness; “見立て” (comparison); “は” and “が”